

FMぐんまと当協会の共同制作番組

# チャレンジ・ザ・ドリーム

## ～群馬の明日をひらく～

平成27年4月2日（第25回）放送

当協会は、平成25年度より、FMぐんまと共同制作番組を毎月1回放送しています。創業・起業の応援をメインテーマとし、群馬発の大企業のトップインタビューを中心に構成しています。放送内容は、当月報に掲載するほか、当協会のホームページでも公開いたします。

### 【プログラム】

#### ●特別対談

株式会社ジェイアイエヌ

田中 仁社長

中小企業庁金融課

菊川人吾課長

◎アナウンサー 奈良のりえ

### ●プロローグ

こんにちは。ご案内役の奈良のりえです。新しいことが始まる4月。起業などの夢への挑戦をテーマにおとし4月から始まりましたこの番組、チャレンジ・ザ・ドリームは、今回の放送で3年目に入りました。新たなスタートを切るつもりでお送りしていきますので、これからもよろしくお願ひします。さて、そんな新年度最初の今日の放送は、お二人の方をゲストにお迎えして、起業やイノベーション、革新をテーマにしたお話をお送りしていきます。ゲストは、眼鏡をアイウェアという概念に変えた「JINS」ブランドを運営する株式会社ジェイアイエヌの田中仁社長、それから、融資などを通して起業を応援する中小企業庁金融課の菊川人吾課長のお二人です。東京飯田橋のジェイアイエヌ東京本社を訪問して収録をさせていただいたのですが、新年度のスタートにぴったりの元気が出るお話になったと思います。およそ1時間にわたり、お二人へのインタビューをお送りしていきます。

### ●特別対談

株式会社ジェイアイエヌ

田中 仁社長

中小企業庁金融課

菊川人吾課長

——私は今、東京飯田橋にある株式会社ジェイアイエヌの東京本社にお邪魔しています。いやあ、視界を遮るものが全くない30階建てのビルの最上階ということもありまして、本当にここからの景観って最高なんですよね。皇居と都心の高層ビル街、そして日本武道館も臨めます。今日はこちらで、ジェイアイエヌの田中仁社長と中小企業庁金融課の菊川人吾課長にお話を伺っていきます。どうぞよろしくお願ひいたします。

(田中社長) よろしくお願ひします。

(菊川課長) よろしくお願ひします。

——田中社長とは、もうこの番組の節目節目にご登場いただきまして、いよいよ番組も3年目になりました。

(田中社長) この番組を聞いて「私、ちょっと起業したくなりました」っていう方が、私の周りに何人かいますよ。

——本当ですか。うれしいですね。

(田中社長) そうですね。

——そして菊川課長は、昨年11月にFMぐんまのスタジオにお越しいただきました。その後、群馬のことを引き続き気にかけていただいたりしていましたか。

(菊川課長) はい。私の近い人間も、実は群馬

でビジネスをやっていますので、そういう意味も込めて、ぜひこの番組、どんどん応援していただきたいなと思っています。

——どうもありがとうございます。

### 【日本における起業の状況】

——さて、田中社長は前橋のご出身で、ビジネスのスタートも前橋でした。

**(田中社長)** そうです。

——はい。東京に進出したのは何年になりますか。

**(田中社長)** 2005年頃から会社の機能を東京に移し始め、本社機能を移転統合したのは2008年です。

——2005年からですか。ちょうど今年で10年ということになるんですか。

**(田中社長)** そうですね。ただ、本社登記は群馬県前橋市にまだ置いてあるので、法人税、所得税、地方税、それから消費税と全て、群馬に納めていますので、そこはもう間違いなきようにお願いします。

——そうなんですよね。もう群馬にいろいろな意味で貢献していただいているわけなんですけれども。1988年に創業を前橋でされています。

**(田中社長)** はい。

——例えば東京に進出するというのは、その頃お考えの中にありましたか。

**(田中社長)** 全くありませんでした。目の前の生活がもう精いっぱい、とにかく毎日の生活を安定させたいと、そんなことばかり考えていました。

——それが2005年には東京に進出されて。

**(田中社長)** 東京に来たきっかけは、会社がだんだん成長し上場が視野に入ってきて、人材を獲得したいと考えたときに、群馬だけでは、当時我が社が必要としたスキルを持った方をなかなか採用できなかったのです。そこで東京に来て、採用活動し、そのまま上場したという感じでした。

——その後というのはどうですか。またさらに急成長したというふうに思われるんですけども。

**(田中社長)** そうですね。ビジネスは、商売をするだけではなくて、会社と一緒に個人そのものを成長させる、非常に素晴らしいものだなと感じています。目の前の安定しか考えなかった人間が、

社会とか、世の中とか、グローバルとか、今言っているわけです。これは、当時の私を知っている人間からすれば、「あいつ、何を言っているんだ」と。

——いや、いや、いや。

**(田中社長)** たぶん言われると思うのです。

——そうですか？

**(田中社長)** はい。でも、それはやはり企業が成長する過程で自分自身が一皮、一皮むけてきたからこそ今があるのだと思うと、ビジネスは人を成長させる、最も有効な手段だと言えらると思います。

——ただ、最近は起業する人が減っているということも、ちょっと耳にします。

**(田中社長)** そうですね。安定志向なのでしょうか。

子どもに対して小さいうちから、5教科をしつかり勉強して、いい大学に行って、大企業に入りなさいと親が言う。さらに言えば、今日いらっしゃる菊川課長ではありませんが、日本のお役人になれば最高という価値観だけを植えつける。それは、もちろん最高ですよ。最高ですけども、でもそれだけではないんだと。ビジネスという選択肢もあるんだよということを、学校やご家庭が、子どもに伝えられれば、その子どもの個性に合った育て方もできるのではないかと、私は今、考えています。

——菊川課長、実際には、今、日本全体としては起業の状況はいかがですか。

**(菊川課長)** 起業家精神の全くない公務員が、こういう説明をするのも何だか……。

——いや、いや、いや、そんな、そんな(笑)。

**(菊川課長)** と思うんですけども、実は、非常に問題だなと思うのは、少なくなっているというよりも、その角度が非常に急激なんです。例えば97年から12年の間の15年間で、起業したいという人が166万人から84万人、要するに半分になっているんですね。これは将来、非常にポテンシャルのように効いてくる。将来の経済が元気にならない一つの大きな原因になってくるので、ここはちょっとその傾向をぜひ止めなきゃいけないと思いますし、私も役所が首になれば、私も起業しなきゃなと思っておりますが。

——何をおっしゃいますか(笑)。

(菊川課長) ぜひそのときはご指導いただきたい。

(田中社長) いや、とんでもありません。



### 【海外における起業の状況】

——田中社長は、起業家の発掘・育成を目指して、群馬イノベーションアワード、群馬イノベーションスクールという取り組みをされています。その中で、アワードの大賞受賞者にはアメリカのシリコンバレーへの研修旅行をプレゼントしているわけなんですけれども、このシリコンバレーの雰囲気というのは、日本と違いますか。

(田中社長) やはり違います。私が世界を見始めたってというのは、きっかけの一つに、経済産業省さんから要請があり、日米でのイノベーションの対話に参加したことがありました。在日アメリカ大使館のジョン・ルース前大使が肝いりで始めた事業なのですが、日本代表の起業家ということでスタンフォード大学に行かせていただいたのです。——はい。

(田中社長) そのとき初めてシリコンバレーに足を踏み入れて、その自由な雰囲気を肌で感じたのです。スタンフォード大学の授業風景をのぞいても、先生と生徒が対等で、先生が一方向的に講義をしてそれを生徒が聞くのでないのです。もう先生と生徒、生徒同士の議論から、物事が進んでいくような、フラットなスタイルにとっても感銘を受けました。

——ああ、こう、クリエイティブな空間ですね。

(田中社長) そうなんです。

——やっぱりそういったところを、一人でも多くの方に知ってほしいという思いがおありなんです。——

(田中社長) はい。

——やっぱり海外を見ることで、いろいろなことが感じられたりとか、多くの刺激が受けられるのではないかな、なんて思うのですが、そういったあたりでは、菊川課長は海外勤務もご経験をされているそうですね。

(菊川課長) 最近までスイスのジュネーブというところにいたんです。

——どのくらい行ってらしたんですか。

(菊川課長) 3年ほど行っておりました。

——そうですか。

(菊川課長) ジュネーブというのは国際機関が多く、私も国際機関の関係の仕事をしていたので、またスタンフォードのあるシリコンバレーとは全く雰囲気が違うと思うんですが、先ほど田中社長がおっしゃっていたように、やっぱりいろいろな人たちが集まって、対等にやっていく、それを受け入れる土壌があるっていうのは、それはヨーロッパもそうだと思いますね。で、私、仕事じゃないんですけども、勉強でアメリカの東海岸のほうに行ったことが、ニューヨークなんですけれども、そっちもやっぱり、働いている人が夜、勉強に大学に来る。そうすると、大学も夜やっているんですよ。そこで、我々学生がそういった人たちと一緒に混ざってやって、そうすると、どんどんビジネスに関するいろんなアイデアがインスパイアされるっていう、そういう、いろんな柔軟性っていうんですかね。そういったものを非常に社会全体として受け入れているという感じはあると思います。

### 【ビジネスはグローバル、個人活動はローカル】

——田中社長は群馬イノベーションアワード、群馬イノベーションスクールという取り組みをされています。そういった取り組みというのは、非常に群馬では今、増えていまして、先日も日経新聞で大きく「起業は群馬で」という記事が載っていました。

(田中社長) ええ、びっくりしました。

——菊川課長もご覧になりましたか？

(菊川課長) ええ、びっくりしました。で、私は

課内の課員に「この社長と俺は今度、対談するんだ」って言って自慢しておきました。

——（笑）。

**（田中社長）** いやいや。思うのですが、起業家というか、商人が、あまり世の中から評価されにくくなってしまった気がしているんです。

——それはどうしてでしょうね。

**（田中社長）** 明治の時代は、社会のインフラが整っていなかったことも一因でしょうが、起業や商売で成功された方が、地域やインフラに対して寄付をするなど、一般市民の方が見て「ああ、素晴らしいな」というような活動をしてきたのです。

——ええ。

**（田中社長）** ところが戦後の日本は、稼ぐことに精いっぱい、起業家は雇用を増やして税金を納めれば社会貢献だとも言われますが、私はそれだけでは足りないと思うのです。

——足りないですか。

**（田中社長）** ええ。企業を一生懸命成長させるとともに、地域に対して自分自身ができることを形として表さなければならぬと思います。ですから私のテーマは、ビジネスはグローバル。

——ビジネスはグローバル。

**（田中社長）** 個人活動はローカル、と考えています。

——大きくうなずいていらっしゃるんですね、菊川課長。

**（菊川課長）** 本当にそうだと思います。

——そのあたりの本当の具体的な活動なども、今後またこの番組の中で、後半伺っていきたくと思いますが、ここで1曲お届けしたいと思います。曲は菊川課長のリクエストで、エクストリームの『More Than Words』を頂きました。

**（菊川課長）** 思い出の曲をと言われたので、25年ぐらい前ですかね、ロンドンに短期で行ったときに、何も、右も左もわからないときに、タクシーに乗ったんですね。そうしたらコックニーなまりの英語で、全くわからなくて、もうどこに連れていかれるかわからないっていう、もう不安で、もう半分涙が出そうなときに、タクシーのラジオから流れたのがこの曲で、で、ちょうどテムズ川の横を走っていて、そのときのこの曲を聞くと、不

安で、でも何とか頑張ったという当時の思い出します。

——それではお届けいたしましょう。エクストリームで『More Than Words』。

### 【国の起業施策】

——さて、先ほどは、日本では起業・創業する人が減っているよと。でも、アメリカやヨーロッパは様子が違うよというお話を伺いました。その差が出てくるのはなぜなのでしょう。あらためて田中社長、どう思いますか。

**（田中社長）** 理由は、菊川課長のほうがお詳しいと思いますよ。

——ああ。菊川課長、ご指名でございます（笑）。

**（菊川課長）** 例えばアメリカやヨーロッパの主要国と比べて、いわゆる開廃業率といいますが、要するに、開業したり、会社を1回たたんでまた再チャレンジするというような率が、日本はやっぱりそういった国と比べると、まあ、半分なんですね。

**（田中社長）** 半分ですか。

**（菊川課長）** 半分なんです。例えば日本で今、開業率って4.6%で、廃業率は3.8%なんですけれども、大体それ、半分以下なんですね。それをもっと増やしていこうというのが政策としてはあるんです。世界銀行が調べたデータがあるんですけど、開業にかかるコストとか、いわゆる会社登記をするときにかかる費用だとか、いろんな手続き面ですね、そういったいろんな開業コストを比較すると、日本は残念ながら120位なんですね。それに比べて、例えばシンガポールや香港、こういったところはベスト5に入っていますし、アメリカやイギリス、こういった国は、20位だったり、28位ということになっていて、そういった環境面をしっかりと整備してあげることが必要なんじゃないかなというふうに思います。

——このランキングは、どういう意味になるんですか。

**（菊川課長）** 日本は120位だと言いましたが、これはコストがかかりすぎる、そういう意味なんですね。それに比べて、シンガポールや香港、これはコストがかからない。したがって起業がしやす

い、そういう意味になります。

——そうした中、起業・創業を後押しするために、国ではどんな施策を行っていますか。

**(菊川課長)** 最初の、やはり資金繰りのところをしっかりと手当てできないかということで、特に若者でありますとか、最近ではシニアの起業家ということがありますので、そういった若者やシニア、そしてあと女性、そういった方々の経営者に対して、低利の資金を提供できるような支援も用意していますし、あとやはり、再チャレンジということだと思います。

**(田中社長)** そうですね。

**(菊川課長)** 失敗したら大変なので、安全なところへ行ったほうが楽だし、親もそのほうが安心です。でも、そうじゃなくて、チャレンジして駄目でも、もう一回やり直しが利くというのが大事じゃないかということで、一度事業に失敗した方でも、もう一回やり直したいという方に向けた融資制度も今回ご用意をしていますし、あと、やはり去年の2月からやっているんですけども、経営者の方が、自分自身の家とかそういったものを担保に入れないと、なかなか借りれないという。そうすると、駄目になると自宅が取られちゃう。そうすると生活もできなくなるって。これはやっぱりよくないということで、金融機関とも一緒にガイドラインをつくりまして、今は個人保証を取らないということを原則にしてやっていこうということで、現在、例えばこの1年間ぐらいですけども、実績でいうと、約4万件以上、額にすると2兆円程度の融資が、個人保証なしで、政府系金融機関から出させていただいています。総理もそういったところには大変力を入れていまして、田中社長が今取り組まれている、ローカルでいろいろとやっていらっしゃるってところが、日本全体のうねりとなっていくとありがたいなと思っております。

### 【群馬イノベーションアワード&スクール】

——田中社長は、先ほどもご紹介しましたが、自ら財団をおつくりになって、起業家を発掘する群馬イノベーションアワード、そして、さらには

人材育成のために、群馬イノベーションスクールという取り組みをされています。これ、もともとはどんなことがきっかけで、こういった活動しようというふうになられたんですか。

**(田中社長)** お恥ずかしながら私自身、昨年卒業したのですが、大学院に行っていたのです。慶應のSFCっていうところだったのですが、そこでは、若い学生がどんどん起業するのです。なぜだろうと思って、いろいろ聞いていると、親兄弟、親戚誰も商売をやっている人がいないから、商売なんて全然遠い存在で、考えたこともなかったという学生が、その学生生活を、先生からビジネスを教わり、卒業生たちが自分の体験を話してくれるような環境で過ごすうちに、ビジネスがとても身近になってくるのだそうです。なおかつ同級生が起業したりすると、あいつができるんなら俺もできるんじゃないかっていう、その気になってくるといふスパイラルになっているのですよ。ああ、そうか。ビジネスがどういうものを伝える場が、まずないよなど。であるならば、同じような環境をつくったらいいのではないかと思ったのです。私は、地元にも絶対ビジネスにセンスのある人、意欲のある人、志のある人がいるはずなので、その人たちのための場をつくろうと思い、始めたのです。

——菊川課長、今のお話をお聞きになっていかがですか。

**(菊川課長)** 周りにそういう方がいない、インスパイアされる方がいないというのは、本当にそうだと思います。私の元に今、データがあるんですけども、ビジネスを興すことに今、無関心だという人で、周りにそういう人がいないというのは、7割なんですね。

**(田中社長)** ああ、やはりそうですね。

**(菊川課長)** やっぱりいないと関心が持たない。逆に言うと、起業家、もう要するに起業をやった人であっても、3割の人は周りにそういう人がいなかったというのが実情なんですね。そうすると、やはり田中社長がリーダーシップを持ってやっていただいているこういった事業で、たぶんこういうギャップがどんどんどんどん埋まっていくん

じゃないかなという気がしています。

**(田中社長)** ビジネスは、まあもちろん難しいのですが、実はそんなに、難しくないんですよ。自分のやりたいことが世の中のニーズに合っているかどうかをまず確認します。で、あとは、どういうビジネスモデルにするか。要はどういうサービス、商品が売れば、幾らぐらい売れて、経費がどのぐらいかかれば、このぐらい利益が出るという、足し算、引き算、掛け算、割り算で済むわけですよ。特別な計算が必要なわけではありません。だから志と、本人のちょっとした才覚があって、真面目に取り組めば、成功するはずだと私は思っているのです。

——志。で、真面目に取り組むこと。

**(田中社長)** はい。真面目じゃない人は駄目だと思います。ええ。ただ、いざ自分が真面目かつて言われると……。

——いや、いや、いや (笑)。

**(田中社長)** 自分も真面目ですとは言いきれません。ただ、仕事に対して不真面目な人は難しいかもしれないです。

——さて、群馬イノベーションアワードが2年、群馬イノベーションスクールがちょうど1年たちました。行ってみたいの感想はいかがでしょう。

**(田中社長)** アワードを通してつながりができているようです。私が知らないところで、いろんなビジネスの芽が、今、育っている。このアワードをやってきてよかったと思います。

——アワードで最終のエントリーまで残られた方が、それぞれにまた新しいビジネスマッチングをなさったりとか……。

**(田中社長)** そうなんです。

——そういう動きがあるんですね。

**(田中社長)** ええ。ビジネスのプラットフォームの一つになんかなるれるのではないかと思いますね。情報発信の場として。そして、行政、例えば群馬県の某市も、このアワードを通して、チャレンジをしている方を知って声をかけるというようなこともあるようです。

——そこまでは、田中社長は期待をしていましたか。

**(田中社長)** いいえ、してなかったんですよ。改めて思うのですが、先が読めない人間でも、こういうふうに行動することによって、一つ一つ先が開けてくるっていうことを知ってほしいんです。——これも一つのチャレンジですね。

**(田中社長)** そうなのです。アワードを始めるとき、「おまえ、そんな余分なことをやって、敵をつくるだけだよ」と言う人もいました。何かをやろうとすると、いろんな障害とか、いろんな意見があるものですが、自分の気持ちが真っ直ぐであれば、一歩踏み出すのは重要だと思いました。

### 【女性、若者、学生への起業支援】

——群馬では今、高校生、大学生がアワードで大変今回活躍をしました。さらには女性も大変頑張っていて、いいご提案をされたり、アワードでしたんですけど、菊川課長、国の政策の中で、そういった若者であったりとか、それから女性たちを応援するような、そんな取り組みなどはありますか。

**(菊川課長)** はい。特に群馬県の女性っていうのは、非常に元気で、何とかと空っ風とか……。

——何かちょっと含みがありましたよね、今。

**(田中社長)** そうですね。

——何ですか。その、お二人で……。

**(菊川課長)** 妻が群馬出身なものですから、そこについてはノーコメントということでさせていただきたいと思います。

**(田中社長)** 実感、こもっていますね。

——そうですね (笑)。

**(菊川課長)** やはり今、全体として、女性が輝く社会とか、先ほど申し上げたとおり、若い人たちの起業意識が減ってきているというのはやっぱり問題で、これは将来、非常にポティブローのように効いてくるので、補正予算としても手当てをしたんですが、女性や若者が使えるような低利融資を、さらに優遇できるような措置をいたしました。それに加えて、U・Iターン。したがって、例えば東京で働いていて、そこでのノウハウを持って群馬で起業したい。そういうようなU・Iターンの方々には、さらに優遇措置があるっていう形で、できるだけローカルでもしっかりと起業が進むよう

な制度を今度手当ていたしました。ぜひ使っていただきたいと思います。

——それから、若者の起業という意味では、先ほども田中社長からお話がありました。学校でもう少し起業について教えたほうがいい。このあたりについては、田中社長、いかがでしょう。

**(田中社長)** 文部科学省にも具体的にどうするかを考えていただきたいですね、菊川課長。

**(菊川課長)** いやもう、どんどん提言しましょう。非常に重い宿題を頂きましたので、しっかりと持ち帰りたいと思います。ただやはり、学校の先生にそれをお願いするだけじゃなくて、やはり田中社長のような方が、まさに教壇に立って、どんどん教える。県内の社長さん、皆さんを、客員講師でも、客員教授でも何でもいいんですけれども、指名したらいいと思うんですね。で、どんどん来てもらう。で、どんどんしゃべってもらう。私もそうですけど、起業したことがない人がベンチャーの政策って、実はできないんですよ。何が大変かわからないから。だから、やっぱりそれをわかっている方がしゃべってもらうということが大事だと思います。

——田中社長は、本当にお忙しい合間を縫って、大学にもご講演に行かれているようですね。

**(田中社長)** そうですね。群馬イノベーションアワードの流れで、共愛学園前橋国際大学や、前橋工科大学、そして高崎商科大学の学長さんにご依頼いただいて、1年に1回、各大学に行っています。また、九州大学、国立九州大学の講師をしています。これは九州大学の教授が、「ベンチャービジネスの授業をやるので、田中さん、講師でお願いしたい」って頼まれてやっています。

——ああ、そうなんですね。

**(田中社長)** あとは、早稲田、一橋、慶応義塾、駒沢大学からもお話をいただいたりもしますが、確かに群馬県からお話を頂くことはあまりありません。ですから、本当に課長がおっしゃるように、群馬県の起業家が、例えば仮に、群馬大学に集中的に行けば、その授業を受けた生徒は、かなりの刺激を受けると思うのです。

——菊川課長のご提案から、なんかまた次の展

開が出てきそうな、わくわくするような、田中社長のアドバイスを頂きました。ありがとうございます。

### 【JINS MEMEに見るイノベーション】

——これまでのところは、起業・創業についての話題が中心でした。ここでは、開業後のお話などを伺っていきたいと思います。引き続きよろしく願いいたします。

**(田中社長)** はい、お願いします。

——事業を始めるのは、初めの一步の大変さがあると思うんですけども、ではそこを乗り越えて始めてしまえば、後は何となるのかといたら、実はそうではなくて、事業を継続、拡大していくには、イノベーション、つまり革新を続けていくことが必要なんだと思います。田中社長、ご自身を振り返って、それこそイノベーションの連続だったような気がいたしますが。

**(田中社長)** そうですね。ビジネスに限らず、何でもそうかもしれませんが、現状にとどまっている、あるいは満足したとたんに、実はそれは後退を意味しているのだということに、似ていると思います。特に私がやっているビジネスでは、新しい取り組みを常に続けていかないと、組織に活力が生まれませんし、お客さまも飽きてしまいます。そういう中での新しい取り組みも、全ては成功しないのです。幾つもやっている中で、1個2個が成功するということを考えると、本当に休んでいる暇がない、と思います。

——そして、現在取り組んでいるのは、やはりJINS MEMEですか。

**(田中社長)** JINS MEMEは、眼鏡の概念を変えるような製品にしていきたいと思っています。この10月にリリース予定なので楽しみにしててください。

——初めてお聞きになる方もいらっしゃると思うので、このJINS MEMEっていうのが、どのようなアイウェアなのかを教えてください。

**(田中社長)** ええ。眼鏡は、人間の目から外界を見る、そういった製品ですよ。

——そうですね。

**(田中社長)** 視力矯正などの機能を通して、外を見るものなのです。ところがJINS MEMEは、「自分を見るアイウェア」なのです。どういうことかといいますと、目には「眼電位」というものがあるのです。JINS MEMEは、眉間とノーズパッドの部分に、世界初の三点式眼電位センサーを搭載して、この眼電位をセンシングすることができます。——眼電位。

**(田中社長)** はい。で、黒目はプラスの電荷を帯びているのですが、この黒目の動きを、この眼鏡を通してセンサーが読み取り、目の動きや瞬きが、わかるのです。それで何がわかるかというと、精神状態や、体の疲れ、眠気とか、病気の予見など、色々なことがわかるのです。

——そうすると、例えば眠いときに運転を少し控えようとか……。

**(田中社長)** そうです。

——ご自分の体調も、疲れ具合もわかるということですか。

**(田中社長)** そうです。例えばJINS MEMEをかけて運転をしていると、眠くなる前に携帯を通してアラームを鳴らしてくれるとか、あとはパソコン作業をずっとしていると、同じ姿勢を長時間すると、肩こり・頭痛につながるのですが、それもアラームで教えてくれたり、あるいは、体の動きに変化があると、もしかしたらこういう病気の可能性があるから病院へ行ってみてはどうかとか、多くのことを知らせてくれる眼鏡なんです。

——楽しみですよ。

**(田中社長)** はい。あと、女性は、健康、ビューティという側面の可能性もあると思います。

——あ、ちょっとこれ、気になりますね。どうということですか (笑)。

**(田中社長)** きれいでいたい、というのは共通の願いだと思いますが、例えば歩き方をモニタリングして、今、あなたの動きは右足に重心が偏ってしまっていますよ、ですとか、体が左右に振れていますよ、ですとか、いろんなことがわかるのです。あとはメンタル。今、あなたはメンタルエナジーが下がっているとか、そういったことにも応用ができそうです。

——眼鏡が、医療というか、健康にまでかかわってくるのかなっていうふうになっていますね。

**(田中社長)** そうですね。JINS MEMEは、色々な活用ができそうだと期待しています。

——菊川課長は、もうずいぶん前からJINSの眼鏡の大ファンってということで、今日はもうずいぶん、何種類も持ってきていただいているんですよ。

**(菊川課長)** これはほんの一部です。

——ええっ？

**(田中社長)** ありがとうございます。

——田中社長に見ていただいたら、もう10年以上前のアイウェアもあるということ……。

**(田中社長)** 驚きました。

——ええ。そうなってきましたと、今後、発売されるというこのJINS MEMEも、期待しますね。

**(菊川課長)** 非常に期待しています。すごいなと思ったのは、眼鏡の、ちょっと概念から外れていますよね。今の日本が抱えているいろんな問題を解決してくれる一つのツールなんじゃないか。もはや眼鏡と言わないほうがいいと思いますね。

——本当にそうですよね。ただ、もう幾つも幾つもイノベーションを興していくことへのプレッシャーとか、大変さというのは感じませんか。

**(田中社長)** それはあまり感じません。

——あ、そうですか。

**(田中社長)** 新しいものを生み出す、考え出すっていうのは、我が社のDNAなので、逆に楽しみです。我々がどんなことをしたら、どんなふうに世の中に役に立てるんだらうと。で、例えばJINS MEMEでいえば、コンセプトはBetter Meなんですよ。

——Better Me？

**(田中社長)** 自分をよりよくする、よりよく生きる、そういった眼鏡なんですよ。

——それ、スタートっていうのは、どういったところから……。

**(田中社長)** スタートは、もともと我が社は産学連携を重視して、研究開発に力を入れようということで、いろんな大学と研究や開発をしているのです。その中で、脳トレで有名な東北大学加齢医



学研究所の川島隆太先生という方とお会いし、何か新しい概念の眼鏡ができないかプレストを重ねていく中で、「眼電位」っていうのがあると、出てきたわけです。でもそれを測るには、パッチを目元やこめかみ近くのあちこちに付けるため、大変な作業が必要だと。もし眼鏡でそれができたらすごいよということで、実現可能な方法を探り、発表まで足掛け4年かかりました。

——4年ですか。

**(田中社長)** 4年かかりました。

——もちろんJINSさんとしてみれば、ファッション性という部分も考えますものね。

**(田中社長)** はい。

——あまりゴテゴテしているものだと格好悪いですものね。

**(田中社長)** そういう意味では、本当に普通の眼鏡に見えて、それが今話題のウェアラブルであり、なおかつセンシング眼鏡ということで評価をいただいています。今年の1月、ラスベガスのCES (Consumer Electronics Show) という2,700社ぐらいが出展している世界最大の家電見本市に出展したのですが、ITガジェット専門のオンラインメディアである米「Digital Trends」が主催する「Digital Trends Top of CES 2015 Awards」のベストウェアラブル賞を獲ったんです。

**(菊川課長)** すごいですね。

——おめでとうございます。

**(田中社長)** ありがとうございます。

**(菊川課長)** グローバルですね。

**(田中社長)** それまでGoogleグラスが比較的有名で、ウェアラブルの世界を変えるなんて言われましたが。

——また腕時計とか出ていますもんね。

**(田中社長)** はい。Googleグラスは、いかにもという形状が受け入れられなかったのか、一般販売をやめてしまったようです。

——そうだったんですね。

**(田中社長)** で、そこに我々の「自分を見る」というコンセプト自体が新しいものですから、海外の方にも受け入れられて、世界中でずいぶん活字になっています。

——菊川課長、今のお話を聞いて、どのようにお感じになりました？

**(菊川課長)** 私、幾つか、今日、眼鏡を持ってきているんですが、その日の気分だったり、家に帰ってオンとオフとかがって変えるんですけど、そうではなくて、もっと科学的にいろいろ変えていけるということがあると、非常に、何ていうんでしょうか、納得感とか、まさに自分のライフが変わっていくなという、まさにこれはイノベーションだと思うんですね。人々の生活・行動様式を変えるって、まさにイノベーションだと思って思います。

#### 【事業承継と第二創業】

——大きなイノベーションがここでまた誕生して、今後がますます楽しみなんですけれども、田中社長は、起業家であり、イノベーターなので、田中社長のような方をモデルにしますと、イノベーター、イコール起業家というふうに考えがちなんですけど、実はイノベーションは起業家の専売特許ではないですし、逆に、既存の企業が発展するために、あるいは生き残るためにもイノベーションは必要ではないかなと思うのですが、菊川課長、いかがでしょうか。

**(菊川課長)** そのとおりだと思います。よく言われるのは、例えば改善であったり、工夫であったり、ちょっとした知恵だったり、そういったことを積み重ねることによって、企業が発展していく。また、新しい業態と結びついて、また新しいビジネスをやる。我々は第二創業だとかいう言い方をしていますけれども、そういったことが、やはり企業がどんどんと持続可能といいますか、ずっと続いていくためには、常に新しいものにチャレンジをして、それが断続的に起こっていくという、これが非常に大事だと思いますし、我々もそういったところについてはいろいろとサポートしたいと思って政策も用意しています。また、田中社長はまだまだ若いので、まだまだこれからだと思うんですが、やはり次の世代に事業を引き継ぐということが、なかなか後継者がいないという大きな問題があるわけです。ですからそのときに、やはり新しい事業を興して、その第二創業という形

で次の世代に渡していく。で、古くなってしまった事業は、そこで整理をする。こういう事業承継がどんどん起こっていくと、非常に円滑になっていくんじゃないかなというふうにも思っています。——新陳代謝ということでしょうか。

**（菊川課長）** そうですね、はい。

——さあ、それではここでまた1曲お届けして、お話を伺っていきたいと思います。田中社長にリクエストしていただいたナンバーをお届けしたいと思います。この方も、やはり群馬のイノベーターの、音楽界のイノベーターのお一人ですね。

**（田中社長）** そうですね。

——それでは、お届けしましょう。布袋寅泰で『バンビーナ』。

#### 【田中社長から菊川課長へのお願い】

——初めにも話題にしましたように、国内では起業、事業を興す人が減ってきています。そうした中、菊川課長は行政として、田中社長は民間の立場で、それぞれ起業、創業の支援を行われているわけですが、お互いへの期待や要望などをここではお伺いしたいと思います。まず、田中社長からお願いいたします。

**（田中社長）** 環境は整ってきているので、行政に具体的に依頼したいことは、さほどありません。

——そのぐらいもう手厚く、先ほどもお話になりましたけれども……。

**（田中社長）** ただ一つ、一般に知られてないということが問題なのです。

——そこなんです。具体的に、例えばどこに相談に行ったらいいとか……。

**（田中社長）** そうです。

——どんな融資制度があるのか、補助の制度があるのかというのが。

**（田中社長）** 恐らく、菊川課長の頭の中に入っておられることは、それを全部机に並べたら、起業しないほうがおかしいというぐらいのメニューがそろっているのです。でも、そのメニューを目にしている人が、若者でも、ほんの一握り、1%いませんよね。これをいかに世の中の人に知っていただくかということ、結構重要だと思います。

——なかなかそのあたりというのは、発信していくって難しいですか。

**（菊川課長）** そうですね。やっぱり行政として、縦割りとかですね、そういうのはあると思うんです。で、使う側からすると、事業者からすると、何々省とか、何々県庁とか、何々市役所って関係ないんですよ。使えるものは全部使いたいということで、今、ミラサポっていう、ミラサポって検索していただくと出てくるんですけども、これは中小企業向けの政策が、これは国レベル、県レベル、市町村レベルで全部網羅的に確認できます。例えば製造業をやっている方が、研究開発をしたい、何か支援はないかっていうことで、キーワードを入れると、その支援策が出てくる、そういったホームページをやっております、非常に今、使われています。自治体の人たちも、どんどんこの施策の中に入れていただいているので、情報量が増えているので、こういったところで見ていただきたいと思います。ただ、私も親類が商売をやっているものですから、時々怒られるんですが、「役所の書類はわからん」と。「何を書いているのか、さっぱりわからない」と言われるので、これは、なかなか直らないです、残念ながら。直らないので、こうやって田中社長が、いろいろとやっていただいているイノベーションアワードとかでも、そういったところでしっかり勉強しろということも応援していただけると、たぶん起業家の方も、ビジネスモデルを考えるだけじゃなくて、それに必要な、例えば事業計画はどう書けばいいのか、自分の事業にかかってくる税制ってというのはどういうものがあるのか、融資を借りたときにどういうふうにお金を返さなきゃいけないのかっていうことは、やはりこういう制度を勉強しないと仕方ないんですよ。役所の書類だとかはわかりにくいのが多いんですが、そこは頑張って勉強しろっていうことも、こういったプラットフォームの中で社長から言っていただければ、これは役所の人が言う、「また、わかんないことを言っているよ」ってなるんですが、やはりビジネスをやっている人が言っていただくと、耳を傾けると思うんですね。なので、そういう形でぜひ一緒に、ベンチャーを

育てていくということを進めていきたいなと思っています。

**(田中社長)** この群馬県も最近、創業ポータルサイト「やる起」というものができて、情報を一元化しようと努力されていますよね。ですが、「やる起」にしても、このミラサポにしても、その存在を皆さん、ご存知ないですよね。ですから、そういったところでは、なんか我々もできることはやっていきたいと思います。

**(菊川課長)** ありがとうございます。

——そして、やはり知ろうとする努力も必要なのかなと思うんですね。今、菊川課長がおっしゃってくださったんですけど、ほんとにミラサポと検索するだけで、出てくるわけですね。メールマガジンも配信していますし、ぜひお一人でも多くの方に、やっぱり興味を持ってもらうということも大切なのかなとあらためて思いました。

### 【菊川課長から田中社長へのお願い】

——では、菊川課長から、田中社長への要望、期待などがございましたら、ぜひお願いいたします。

**(菊川課長)** いやもう、大先輩に要望っていうのもあれなんですけど、2点あります。一つは、ぜひ群馬イノベーションアワードに呼んでください。

**(田中社長)** ああ、もうぜひ、ぜひお願いします。

**(菊川課長)** それともう一つは、先ほど環境は整っているというお話がありました。これは我々としてはうれしいのですが、ただやはり行政だとかそういう制度を整備する側からすると、ぬるま湯になってしまうので、常にこういった点が不十分だと。例えばアメリカと比べて、こういった税制がおかしいんじゃないか、こういった規制はおかしいんじゃないか。研究開発をやられていた中でも、いろんなたぶんあったと思います、現場では。そういったところをずっと言い続けていただくということが大事ななと思います。

**(田中社長)** いや、私のビジネスの目標で、そういったところまで膨らませて言及すると、言いたいことは沢山あるんですよね、ええ(笑)。

**(菊川課長)** ぜひ、じゃあ、レコードに残らない形で、まずは聞きしたいと思います(笑)。



### 【目標はGo to the Gunma】

——まだまだ話が尽きないようなんですけれども、最後にお二人から、今後の目標についてお話しただきたいんですけども、初めに田中社長に伺います。ジェイアイエヌとしての目標、そして、群馬イノベーションアワード、イノベーションスクールの目標、この2つについて教えていただけますか。

**(田中社長)** はい。ジェイアイエヌの目標としては、この前橋で生まれた企業が、いったいどこまで世界の人々に喜ばれるブランドとして通用するのか、それを挑戦していきたいなというふうに思っています。結果として、売上や、利益、あるいは世界一などがあるわけですが、我々は第一には、我々の眼鏡を通して、どれだけ人々の生活を豊かにできるかを突き詰めていきたいと考えています。もう一つは、群馬イノベーションアワード、そして群馬イノベーションスクールですけども、私でもある程度できるわけですから、群馬県には私よりももっと能力の高い方が沢山いらっしゃるのです。お世辞抜きで、本当にそう思っています。ですから、そういった方々がビジネスにチャレンジをして、志を見つけて、世界に飛び立てるようになれば、群馬県がすごい地方になると心から信じています。私、群馬で成功すれば、日本中で成功する気がするのです。

——それはどうしてですか。

**(田中社長)** なぜなら群馬県は、中位の県ですよ。特に私が生まれた前橋は中位の都市です。商売とすれば、新宿とか池袋とかに比べれば、人口は少ないし、市場は小さいわけです。そこで成功すれ

ば、日本全国似たような都市は沢山あって、東京はより肥沃な土地なわけです。一方、東京で、新宿で大成功しましたというものが、前橋で成功するかというと、それはわかりません。ですから、群馬県でチャレンジをして、群馬で成功するっていうことが、イコール、日本で成功する、そして世界で成功するという、その一つの試金石の場所だと考えたら、群馬県、創業のしがいがあるのではないのでしょうか。

——ぜひ、菊川課長、バックアップをしていただきたいですね。

**(菊川課長)** 群馬イノベーションアワードで大賞特典というのは、シリコンバレーに見に行くっていうのが特典だそうですけど、これが、やはり世界中の起業家が群馬を見に行くと、群馬を見に行こうっていうツアーが、やはり……。

**(田中社長)** すごいですね。

——すごいですねえ (笑)。

**(菊川課長)** Go to the Gunmaと。シリコンバレーじゃないと。そんな時代が来るんだと思います。ですから、そういったところについて、我々行政もそうですし、それを取り巻く、いろんな大学、教育機関だったり、金融機関だったり、保証協会のようなサポートしていただける方が、社長にプラットフォームをつくっていただいているので、ぜひみんなで頑張って実現したいと思います。

**(田中社長)** よろしくをお願いします。

**(菊川課長)** よろしくをお願いします。

——それでは、菊川課長、中小企業庁というよりは、たぶん国のということになりましょうが、今後の目標についてお聞かせいただけますか。

**(菊川課長)** もう先ほど申し上げたとおり、やはり世界中のイノベーターが、群馬を、そして日本を逆に見に来るといような世界にしていけるような国、そして地域にしたいなと思っています。ぜひよろしくお願ひいたします。

**(田中社長)** こちらこそ、よろしくをお願いします。

——いや、今日はとてもエキサイティングな、そんな……。

**(田中社長)** エキサイティングでしたね。

——ですよ、チャレンジ・ザ・ドリームだっ

たなと思うんですけど (笑)。

**(田中社長)** 今日、私もなんだか熱くなりました。——ええ、ほんとです。株式会社ジェイアイエヌの田中仁社長と、中小企業庁金融課の菊川人吾課長のお二人にお話を伺ってきました。お二人の活躍と、そして元気な社会づくりができることを期待しています。今日はありがとうございました。

**(田中社長)** どうもありがとうございました。

**(菊川課長)** ありがとうございました。

## ●エピローグ

夢への挑戦をテーマに、明日へ向かって走っている人を応援する番組「チャレンジ・ザ・ドリーム」。今日は株式会社ジェイアイエヌの田中仁社長と、中小企業庁金融課の菊川人吾課長のお二人をゲストに迎え、起業やイノベーション、革新などをテーマにお話を伺いました。東京飯田橋のジェイアイエヌ東京本社で収録させていただいたのですが、地上30階にあるオフィスからの見晴らしは最高で、そんなことも手伝ってか、元気の出るお話で楽しい時間を過ごさせていただきました。新年度スタートのこの時期、お聞きいただいている方々へのエールになればうれしいなと思います。さて、トップインタビューの様子は、ポッドキャスト配信も行っています。FMぐんまホームページの「チャレンジ・ザ・ドリーム」のサイトをご覧ください。

「チャレンジ・ザ・ドリーム～群馬の明日をひらく～」の番組は「頑張るあなたを応援します！群馬県信用保証協会」の提供でお送りしました。ご案内役は、私、奈良のりえでした。

FMぐんまと当協会の共同制作番組

**チャレンジ・ザ・ドリーム**

～群馬の明日をひらく～

【6月の放送のお知らせ】

平成27年6月4日 (木) 12:00～12:55

再放送 6月6日 (土) 8:00～ 8:55

ぜひお聞きください！